ハンドボール競技におけるチーム戦術に関する事例研究
ーH 高校の攻撃戦術を中心にー

高橋　喜春（1504044）

＜序論＞

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールは攻防が交互に訪れ、その中で相手より、より多くの得点を決めるという非常に分かりやすいスポーツである。しかし、相手の防御から点数を取ることは簡単なことではない。そこで、いかにして自チームの攻撃を点数に結びつけることができるかというところにチーム戦術、攻撃戦術というものが出てくる。筆者は、ハンドボールを始めて現在７年目になるが、戦術に関して理解が至っていない点が多いことに気づいた。そこで、戦術という言葉を次のように捉えた。戦術は、目の前の状況を打開していく術である。ハンドボールはチームスポーツである。一チームがどのように戦術を駆使し、状況を打開していくのか、そこに選手がどのように関わっていくのかという動き方を視点にしてチーム戦術について深めていきたいと考えた。

本研究の目的は、試合の流れの変動を捉え、そこにチーム戦術がどのように関わっているのか明らかにすることである。方法としては、第 62 回国民体育大会少年男子優勝チームである福井県（H 高校）の全試合から、試合の流れが大きく変化した典型的な事例を抽出し、チーム戦術がどのように関わっているか分析していく。また、特徴的な攻撃戦術を類型化し、それらがどのように試合に影響しているか間主観性に基づく関与観察により明らかにしていく。

＜本論＞

第１章　事例研究の意義

事例研究はひとつの個別の事例から間主観的に関与観察し、その中で自分自身が観察対象に「引き込まれ」ていったり「成り込んだり」しながら把握するものである（鯨岡、2002）ある事例について理解を深めていくとき、研究対象に共感し、筆者自らの主観で厳密に解釈、記述していかなければならない。このように、体験に密着し、研究者と対象とが共鳴しあい、経験や直感を深く研究していくことが事例研究の大きな特徴だといえる。

第２章　ハンドボール競技の構造的特性

ボールゲームの特性から、ハンドボールはどのような特性を持っているのか考察しまとめた。また、チーム戦術についてまとめた。チーム戦術は、すべてのプレーヤーによる共同作業である。プレイシステムの選択と投入、グループ戦術の行為と個々のプレーヤーの行為の統合、チームの構成とチーム編成問題、ゲーム構想を実行に移すこと、均衡がとれていて安定した攻防の競技力を組織すること、ゲームの勝敗を決定する時点での行動方法と、決定的なゲームの局面における行動方法が含まれる。（シュティーラー・G. 1993）

第３章　ゲームの運動観察方法について

ゲームの運動観察方法についてまとめ、問題点を示唆した。これまでのゲーム分析は、客観性が重要視され、数量的な分析方法が主流だった。そこで、本研究ではゲーム観察するために、「ゲームの流れ」、「ゲーム局面」（佐藤、2002）を観察の視点とし、質的な分析を進めていく。

第４章　ゲームにおけるチーム戦術の観察

本研究では、国民体育大会における H 高校の全４試合から試合の流れが大きく変化した４事例を抽出し、それらにチーム戦術がどのように関わっているかを分析・考察を行なった。このことにより、流れを生み出す要因としてミス、もしくはボール奪取からの攻防の切り返し。数的不利・有利な情況等の情況変化。攻撃戦術が個人個人「同調」し、成功している時が考えられる。また、チーム戦術の成功も流れの善し悪しに左右されることが考えられる。

また、典型的な５つの攻撃戦術を抽出し特徴を明らかにした。

[①サイド、45°のポジションチェンジ]　最も多く観察された。一番最初のセット攻撃で必ず使っている。

[②サイド、45°、センタークロスからのきっかけ]　展開局面をいろんなかたちに変化させている。“きり”や“ずれ”を意図的につくっている。

[③数的有利時の攻撃戦術]　相手が一人少ないとき、セット攻撃はすべてこの戦術である。

[④上３枚の揺さぶり]　センター、両 45°の３人による素早いパスワークによって“ずれ”をつくっている。

[⑤ポストフロートから]　センター、ポストで“ねじれ”をつくって展開している。

＜結論＞

本研究では、H 高校のゲームにおける戦い方をゲームの流れ、ゲーム局面を視点に観察し４つの事例を挙げ、質的分析と考察を行なってきた。さらに、典型となる攻撃戦術を明らかにして５つに類型化した。チーム戦術は、すべてのプレーヤーによる共同作業である。その成功はゲームの流れを生み出すきっかけにもなるが、流れに左右されることも少なくはない。また、共同作業であるがゆえに、プレーヤー一人一人が同調した運動感覚を共有しなければならないだろう。それは、日頃のトレーニングの積み重ねにより培われていくものである。また、チーム戦術には監督のゲーム構想の考え方が反映されてくる。日頃から選手が監督の考え方を理解していくことが大切であろう。

この研究方法は、いまだ未成熟の方法である。本研究では、ゲームの流れ、ゲーム局面を観察・考察のカテゴリーとした。ゲームという複合的な現象を明らかにするとき、カテゴリーをより厳密に規定していくことが今後の課題となるだろう。

（参考・引用文献省略、資料参考）